様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　12 日現在

機関番号：53101
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：　22520642
研究課題名（和文）英語授業での表現活動が学習者同士の人間関係に及ぼす影響の研究

研究課題名（英文）A study on the influence between the students' relations and their English-speaking performance

研究代表者
大湊　佳宏（OMINATO YOSHIHIRO）
長岡工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究者番号：70413755

研究成果の概要（和文）：
本研究では、教室内で行われる英語表現活動と、その活動に参加する学習者同士の人間関係はどのような関係があるかの調査を行った。hyper-QU の結果を用いて、健全で良好な人間関係を保っている学習者とそうではない学習者同士が、英語授業中にペアで行う英語対話活動においてアウトプットする発話の特徴についての調査を行った。結果、健全で良好な人間関係を築いている学生群がそうでない学生群よりも、学習者関の対話の中の沈黙の時間が有意に短いことが明らかになった。さらに、同一トピック内の発話総語数が健全で良好な人間関係を持つ学習者群の方が多いことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study was conducted to find out how students' relations in their classrooms influence on their speaking output when they chat in English in pairs. They (n=88) were divided into two different-type pairs; pairs whose human relationships are going well, or not. The relationships were measured by the result of the hyper-QU test. Results showed that students who felt they could keep a good human relationship sustained their English chat without fewer pauses rather than the other group, and they could also produce more words within a topic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,9000,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育、英語表現活動、人間関係、ペアワーク

１．研究開始当初の背景

他人と関わることが困難な学生の存在が、本研究のスタート地点であった。高等専門学校に限らず、小中高校、大学においても、授業には学生が学習集団として集まり、そこには少なからず何らかの「関わり」が存在する。2005 年に文部科学省が行った「義務教育に関する意識調査」で、60～70%の中学生の保護者と担任は「人間関係を築く力」を養ってもらいたいと回答している。また、英語教員の立場から見ると、英語の表現活動を教室内で行う際に、ペアやグループになる生徒との良

好な人間関係を築いておくことは言語学習の目的を遂行する上で重要な要因である（大湊，2005）。しかしながら、実践や研究公開授業（大湊，2009）を重ねるにつれ、この関係を科学的に立証する必要性と直面する。教室内での人間関係が良好の状態とはどのような状態の事を言うのであろうか。はたして、その良好な人間関係が保てているグループとそうではないグル―プでは、英語の表現活動をするうえでどのような違いがあるのであろうか。

教室内で行う英語表現活動とコミュニケーションが取れる学級経営というのは相互の関係にあり、お互いの心のやり取りや意見のやり取りを、特定の言語（本研究では目標言語（英語））を用いて行うことにより、相乗的に改善できないだろうかと言う考えに至った。

英語授業の教室内では、①生徒の活動量が増える、②生徒の自主的な発想が生かせる、③仲間と協力関係ができる、④Communicative な状況で練習ができる（語学教育研究所，1988)などの理由で、ペア・ワーク（ペア活動）が授業内の言語活動に取り入れられており、Storch (2009)は彼女の様々な取り組みを研究成果として報告している。Storch の研究の中には、ペアになる者同士の関係によって、活動のアウトプットが変化することが報告されている(2002)。彼女は，オーストラリアの大学の ESL において、19 歳から 42 歳（n=33）を対象に、3 つのライティング・タスク（Composition, Editing, Text Construction）を課し、ペア同士の発話の特徴(equality:発話の機会は平等かどうかと、Mutuality:お互いにアイデアを出し合っているか)を調べると同時に、そのどのような組み合わせのペアが、どのような結果を出すかについて調査を行った。その結果、Collaborative と Expert/Novice のペアに多くの transfer of knowledge がみられたと報告している。

ペア学習の有用性としては、Storch & Wigglesworth (2007)は、レポートを個人で書かせた場合と、ペアで書かせた場合を比較し、ペアの方がより正確に書きあげると報告している。しかし、Foster & Skehan (1999)は、グループでのプランニングを行と、流暢さ、複雑さ、正確さは個人で学習する方が良い結果であったとしている。また、国籍や文化的背景によっても、学習者が好む学習スタイルが変化することもある(Mishra & Oliver, 1998)。このように、ペア活動を行う際には、どのような学習者同士をペアに設定し活動を行うかも大きな問題のひとつとなり得る。さらには、de Saint Léger & Storch (2009)の研究では、グループやペア内での発話を促す動機(WTC: Willingness to Communicate)は親和動機に影響されると報告し、佐藤(2004)はただチャットするだけの英語授業での活動は「協同」とは呼べないとしている。

英語能力と対人コミュニケーション能力の関係についての研究もなされており、横堀(2002）は、対人コミュニケーション能力をコミュニケーションの積極性、不安度、自己開示積極度、議論好き度、そして英語力を TOEFL テストのスコアと定義し、それぞれの間の相関関係はみられなかったと報告している。同様に、大湊・他(2011)の研究でも、hyper-QU の測定結果（①学級満足度、②学校生活意欲、③ソーシャルスキル）と、英語授業（文法、読解、OC）の成績、そして、TOEIC Bridge-IP 試験の結果のそれぞれの間の相関関係を調査したが、「学習意欲」との相関は認められた(r>.6)ものの、そのほかに目立った相関関係を発見することができなかったと報告している。

２．研究の目的

英語の表現活動が人間関係に及ぼす影響を調査する以前に、前提として、「良い」人間関係「悪い」人間関係にある学生同士のペア活動は、彼らの英語能力にどのような違いが観察されるかを調査する必要がありそうである。そこで本研究では、「良好で健全な人間関係」が築けているグループと、築けていないグループの差を調査することとなった。

高等専門学校において、授業の成績は一般的には試験の成績や小テストの結果、提出物やレポート課題、授業態度など、担当教員によって差はあるにせよ様々な構成要素が組み合わさって算出されており、ひと言で教室内での人間関係が成績に影響するという事が言えないであろう。また、TOEIC 試験のようなペーパーテストは、相手と向かい合い、英語という言葉のやり取りを行う力を直接的に評価するものではなく、その知識やリスニングの能力を評価する。すなわち、2 者間の学級内での人間関係が英語の成績やテストの結果に及ぼす影響は少ないという事が推測される。では、良好で健全な人間関係を教室内で保つということは、英語力（本研究では英語表現活動）のどのような部分に影響するのであろうか。本研究において，教室内での人間関係とは、「教室内で他の人から侵害を受けていない」そして「教師や周りの級友から受け入れられている（認められている）存在である」ことと定義づけする。さらには、この２項目は hyper-QU のアンケートにより測定可能なものである。

そこで、以下の２つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1：hyper-QU で「良好・健全な人間関係」である（＝学級生活満足群）と診断され

た学生同士（ペア）の英語対話の特徴は何か

RQ2：hyper-QU で「良好・健全な人間関係」ではない（＝非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群）と診断された学生同士（ペア）の英語対話の特徴は何か

３．研究の方法

（１）被験者

20**年度 A 高等専門学校 2 学年(5 クラス、207 名）を対象に hyper-QU を実施した。被験者の年齢は 16 歳から 19 歳。英語の熟達度は、クラスの約 6 割が英検準 2 級の合格者で、9 割程度が英検 3 級に合格している。しかし、英検 2 級以上の合格者がいない集団である。事前に各クラス担任に hyper-QU の効果と必要性を説明し学生全員が受験する承諾を得て、教室内の状況把握の一資料になることを伝え、実施の協力・理解を得てから調査を開始した。hyper-QU の診断結果（フィードバック用のスコアシート）は学生個人に返却をし、気になる学生には教育相談などの個別指導を行った。実施期間は、20**年 11 月下旬に特別教育活動の授業などで行った。それと同時期に（10 月から)、筆者が英語を担当する同学年の 3 クラスを対象に、英語対話活動を開始（英語対話テストは 2 月に実施）した。hyper-QU と英語の対話テストを受験し、分析の対象として得られた有効なデータは 88 名（44 組のペア）であった。男女比は約 9 対 1 であるが、性別の違いによるデータの差の要因を取り除くために、性別の違うペアのデータは除外した。その他にも、授業担当者の指示とは異なる活動を行ったり、日本語を過度に使用しているペアや、制限時間（2 分）を守らずに対話テストを行ったりするペアのデータもまた分析対象からはずした。

（２）hyper-QU

hyper-QU アンケートが明らかにする項目は、①学級満足度尺度、②学校生活意欲、③ソーシャルスキルの 3 点である。その中でも、教室内での人間関係が反映される①学級満足度尺度の結果に焦点を当て分析を行った。学級満足度尺度は、承認得点と被侵害得点の 2 軸でプロットされ大まかには以下の 4 つカテゴリーに振り分けられる。

①学級生活満足群：学級内に居場所があり、学校生活を意欲的におくっている生徒

②非承認群：いじめや悪ふざけなどを受けてはいないが、学級内で認められていることが少ない生徒

③侵害行為認知群：いじめや悪ふざけを受けているか、他の生徒とのトラブルがある可能性が高い生徒

④学級生活不満足群：耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い生徒

①に振り分けられた学生は、学級内において問題が非常に少ない状態で学校生活を過ごしているが、②から④のカテゴリーに振り分けられている学生は、何らかの問題を感じて学校生活を過ごしていることになる。そこで、この 4 つのカテゴリーをさらに以下の 2 つのカテゴリーに再分類した。

Category1：①学級生活満足群

Category2：②非承認群、③侵害行為認知群、④学級生活不満足群

（３）英語対話試験

英語対話試験は、2 学年の英語Ⅱの授業内で実施した。英語Ⅱの授業は週に 2 回（90 分と､50 分)実施される 3 単位の授業であり、文部科学省の検定教科書（英語Ⅱ）を使用して行われている授業である。その授業内において、週に 1 度だけ、15 分から 20 分を利用した帯活動として英語でのチャット活動を導入した。その方法は、教室内で 2 人一組のペアをランダムに作り、話し合うトピックは設けずに、「2 分間英語で話し続けることができる」という目標を設定し､行ったものである。道面(2009)の英語チャット活動を参考にして、「英語で 2 分間話し続けるコツ」を学生自らが見つけ出す時間を活動内に設け、被験者は自らの英語対話を振り返り、対話を長続きさせるために思いついたアイデアをクラス全体でシェアして次週の活動につなげた。本調査時にあげられたアイデアは、相手の話に反応すること（I see. Uh, huh. Really. You did. Did you? So do I. などのあいづちをうつこと)、アイコンタクトをすること、話の投げかけ（相手からの疑問文）に対して 2 文以上で答えること、笑顔で会話をすることなどが共通してあげられた。

授業内でのペアの設定は、毎回同じペア同士にならないように、授業担当教員がランダムに決定したが、2 月に実施した英語対話テストの際には、彼らのペアの組み合わせを恣意的に操作した。人間関係が良好な者（本研究では Category1 に該当する学生）同士のペアと、教室内での人間関係に何らかの問題を抱えている者（本研究における Category2 に分類された学生）同士のペアで英語対話テストを実施した。英語対話テストは、教室とは別の小さな学習室を３部屋と廊下ホールの４箇所を用意し、テストの様子を被験者にビデオに撮影してもらいデータとして残した。その対話テストのビデオのスクリプトを全て書き起こし、聞きとりづらい個所に関しては、他の英語教育を専門とする大学教員と協議し、１つの表現に決定した。

（４）分析項目

英語対話テストでスクリプトに書き起こされたデータの分析を行ったが、その分析項目は以下の７つのポイントについて分析を

行った。

①Number of Words (NW)：対話内で発せられた総語数（２人の総発話語数を合わせたもの）

②Number of Turns (NT)：対話内で発せられた総ターン数（ただし挨拶は除く）

③Number of Topics (NTO)：対話内で出現した話題（トピック）の数

④Words per Topic (WPT)：１つの話題（トピック）内の総語数

⑤Turns per Topic (TPT)：１つの話題（トピック）内の総ターン数

⑥Number of Questions (NQ)：ペア同士お互いに投げかけた疑問文の数

⑦Length of their Silence (LS)：約１秒以上沈黙したポーズの総時間（秒）

分析項目を調査する際、LS (Length of their Silence)を客観的に測定する方法（音声処理ソフトなど）を採用すべきであったが、本調査では著者と英語教育学を専門とする大学教員（２名）とそれぞれに対話内での沈黙の長さをストップウォッチで測定し、その平均秒数を分析データとして採用した。また、会話の隙間を埋める filler を使用した場合は、LS としてはカウントはせず、発話しているものであるとみなした。

（５）統計

分析できるペア数が 44 組と少数で、そこから得られるデータの分布は不安定であり、正規分布を仮定できないことから、本研究では Category1・2 間の差を、ノン・パラメトリック検定で産出することにした。その中でも、２つの独立した標本を検定するマン・ホイットニーの U 検定により、得られたデータを両側検定（5%水準）で分析し、それぞれの項目において比較を行った。

４．研究成果と今後の展望

hyper-QU の結果を Category1・2 に分けたグループと英語対話テストの分析項目の調査の結果は、まず、LS (Length of their Silence)の差が 5%水準で有意であった。このことは、Category1 同士の学生のペア(18.82 秒）の方が、Category2 同士の学生のペア（24.48 秒）よりも沈黙している時間が短いことを示している。確かに、Category2 のペアの中には、なかなか会話がはずまず、沈黙の多いペアが存在したように感じられた。さらに、WPT (Words per Topic) は、Category1 (70.43) が Category2 (53.08) よりも多く、これは同一トピック内で Category1 同士のペアの方が、同一トピック内での発話総語数が多い傾向にあることを示している。有意確率は $p<.1$ と有意差はないが、有意傾向にある。

その他、統計的には有意ではなかったが、次のような特徴もみられた。まずは、NW (Number of Words) は Category1 (120.29) が、Category2 (114.25)より多かった。同様に、TPT (Turns per Topic) や NT (Number of Turns)も Category2(TPT:8.16, NT:18.81) よりも、Category1 (TPT:11.93, NT:18.81) の方が多かった。しかし、Number of Topics (NTO)は、反対に Category2 (2.82)の方が Category1 (2.03) よりも多い結果となった。結果をまとめると、Category1（良好で健全な人間関係同士）の英語での対話は、①沈黙時間が短く、ペア同士がお互いに言葉を出し合っており、②1 つの話題に対して発話量が多く、話を深く掘り下げて、話を広げ長続きさせる傾向にあることが分かった。しかしながら、Category2（人間関係に何らかの問題がある者同士）の英語での対話は、①1 つの話題について比較的多くを語ることができず、すぐに別の話題へと移行してしまいがちであり、表面的な会話でその場をやり過ごす傾向にあった。そして、②ペア同士がお互いに黙り込んでしまうことが多いという特徴が発見された。

以上、本調査では、英語対話活動の参加者の人間関係の良好さによって、彼らのパフォーマンスが一定の項目（Length of their Silence と Number of Topics）によっては変化することが明らかとなった。しかし、唯一有意差の出た LS の測定を、筆者らの主観で行った点、次回は音声ソフトを使用するなど改善の余地があり、違う結果が出る可能性が否めない。

また、本研究の調査対象者が 44 ペア（88 名）と少数であること、そして調査した学校が A 高等専門学校と１校であることからも、この結果を直ぐに一般化することは難しい。しかし、ある程度ではあるが良好で健全な人間関係を保有する学生同士（又は保有しない学生同士）に、英語対話の進め方にある程度の特徴があることが明らかになった。沈黙時間が比較的短く、話に深みが出る（またはその反対)、すなわち２者の会話がはずむ（または、はずまない）のである。ここまでは、現在の教室内の人間関係が英語の対話活動に与えた影響の調査であるが、この逆のパターンは成り立つのであろうか。例えば、より沈黙が少なく、１つのトピックについて多くを英語で話す活動を続けると、人間関係が少しずつ良好になっていくのだろうか。今後は教室内での英語表現活動が教室内での学生間の人間関係を良好で健全なものにすることを実証するために、継続して調査を行いたい。

さらには、本研究を進める過程で、Category1 と Category2 に分類された参加者の英語の熟達度に関しての配慮・調整が行われていなかった。県内の入試で比較的同等レベルの学力の学生が入学してくると仮定し

たいたが、両グループの参加者が、同等な英語力を持った状態であったかを統制すべきであったことは反省点である。

本調査で使用した７つの分析項目でしか英語対話を分析せず、被験者の言語使用や彼らの発した言葉の特徴については注目してこなかった。被験者の発した言葉の機能にも注目し、言語習得を促すようなInteractional Feedbackが存在しているのかどうか、ある特定の discourse marker を使用してはいないだろかなどの特徴の調査も考えられる。Storch(2002)の先行研究のようなExpert/NoviceまたはCollaborativeな関係の言葉のやり取りを行っているのかなども含め、今後も調査を継続していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 前川直也・大湊佳宏・一色誠子．(2013)「高等専門学校生の攻撃性と対人信頼感について」『高専教育』, *36*, pp.539-544, 査読有.
2. 大湊佳宏.(2013)「教室内での人間関係が英語対話活動に与える影響について」『中部地区英語教育学会紀要』, *42*, pp.39-44, 査読有
3. 峯島道夫・茅野潤一郎.(2013)「日本・韓国・フィンランドの英語教科書の設問の比較分析調査－教科書はクリティカルシンキングを老教えるか－」『中部地区英語教育学会紀要』, *42*, pp.91-98, 査読有

〔学会発表〕（計４件）

1. 茅野潤一郎，峯島道夫，大湊佳宏．スクリプトの有無によるリスニングテキストの比較分析．外国語教育メディア学会．2012年８月７日～８月９日．甲南大学（兵庫県）.
2. 大湊佳宏，峯島道夫，茅野潤一郎．教室内での人間関係が英語対話テストに与える影響について．中部地区英語教育学会．2012年６月30日～７月１日．じゅうろくプラザ（岐阜県）.
3. 峯島道夫，茅野潤一郎，大湊佳宏．日本・韓国・フィンランドの英語教科書の設問の比較分析調査－教科書はクリティカルシンキングの伸長につながる読みの指導を求めて－．中部地区英語教育学会．201年６月30日～７月１日．じゅうろくプラザ（岐阜県）.
4. 大湊佳宏，茅野潤一郎，峯島道夫．教室内の人間関係と英語力の関係．外国語教育メディア学会．2011年８月７日．名古屋学院大学.

６．研究組織

(1)研究代表者
大湊　佳宏（OMINATO YOSHIHIRO）
長岡工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究者番号：70413755

(2)研究分担者
茅野　潤一郎（CHINO JUNICHIRO）
新潟県立大学・国際地域学部・講師
研究者番号：50413753

峯島　道夫（MINESHIMA MICHIO）
新潟工科大学・工学部・准教授
研究者番号：105112981